

# 【ねがいましては】

第83号

平成8年4月5日

共和珠算学習塾

「やさしさの本質」

「やさしい」と聞くと、とてもあたたかい言葉、思いやりのある言葉として受け入れられることと思います。ところが、この「やさしい」は、ときに違うものへと変化するようです。子どもたちの世界です。学校でのこと。「ねえ、こんどの私たちの先生ね、とってもやさしいの。だってねぜったいにおこらないもん」「えー、私たちの先生なんかすぐ怒るのよ。それもすごく怖いんだから・・・。」などと、「やさしい」の本質を子どもなりに受け取ります。いたって自然な反応なのかもしれません。

いったい子どもたちは「やさしい」をどのように捉えているのか、その子自身の幼少期からの過ごし方で結構違いがあるのではないかと考えています。まず環境です。その中心的存在が、ご両親でしょう。

「わたしのお父さんね、いつだってなんでも買ってくれるの、やさしいんだ。」「おともだちの〇〇ちゃんね、おかし持っているとすぐくれるの。」

明らかに本人の物欲を満たす結果に満足する「やさしさ」です。自分が得をすること、もらえること、優先順位が自分に向いていることが「やさしさ」の本質と捉えがちです。立証しましょう。その逆です。「うちのお父さんね、〇〇ほしいから買ってってたのんでも絶対に勝ってくれないの」「〇〇ちゃん、お菓子持ってもくれなかったり、くれてもちょっとしかくれないの」完璧な利己主義です。何がそうさせるのか、スタート第一歩で「もらってしまう」と、それが続きます。次第に「あたりまえ」へと成長し、やがてもらえないと、「人のせい」にします。「あの人はやさしくない」。

本来のやさしさとは、もので置き換えられるものではないと思います。モノよりもっと重いもの、「こころ」です。

何が正しいことで、何が悪いことなのかを伝えていくことが子どもたちの健全な成長には欠かせないと思います。ただその中になるべく存在しないでほしいもの「感情」だと思います。

「叱る」と「感情」の両者は手をつなぎがちになりやすい関係だと思います。

ご家庭からスタートする「やさしさ」の伝わり方が、とても重要だと感じています。

「やさしさ」はときに厳しさへと形を変え子どもたちへと降り注ぎます。その厳しさの裏側に隠れている「やさしさ」を子は常に待っているのではないのでしょうか。

「厳しい＝こわい」ではなく、「厳しい＝やさしさ」であることを強く理解していच्छやるのは、これをお読みになっているお父さん、そしてお母さんだと思います。きっと幼少時に「本気」で叱られたご経験があると思います。その時、こころに溢れる「あつたいもの」を私も子どもたちに注いでいけたらと思っています。

他人の心の痛みをこころから理解してあげること、心配してあげること、「やさしさ」には隠された役割が多岐にわたってあると思います。

やがて子が成長し、親を叱るときが来るかもしれません。その時、心にこみあげる温かさを楽しみにしながら「子育て」、大変なお仕事だと思います。陰からそっと応援させてください。

「お父さん、お願いだから病院へ行って、なんで行かないのよ。」と、娘さんが涙を流しながら父を叱ります。しっかり「叱る」と「感情」が融合した美しい瞬間もありました。